



～伝統産業PRの巻～

隠れた地方の名品を世界へ！ 「伝統と先端と～日本の地方の底力～」

(一財)自治体国際化協会パリ事務所所長補佐 (群馬県太田市派遣) 西山 礼

クレアパリ、自主企画展示会

近年、自治体間でも観光客誘致や地域産品の海外販路開拓などの経済活動に対するニーズが高まっており、経済関連のイベントへの自治体の参加も増えています。そこで今回は、自治体のみなさまの新たな経済活動促進の手段、「伝統文化・伝統産業情報発信モデル事業」として開催した自主企画展示会「伝統と先端と～日本の地方の底力～」をご紹介します。

伝統産業の“今”を伝える

「伝統と先端と～日本の地方の底力～」

日時：2014年2月11日～22日

場所：パリ日本文化会館 (Maison de la Culture du Japon à Paris : MCJP)

目的は、この機会を通じて、日本の地方に根差した伝統産業技術にスポットを当て、あるものは現代的なデザインや新しい生活スタイルを提案するなどモダンに花開き、また、あるものはほかの分野の先端技術として活用され現代人の生活を支えるなど、多様に発展する日本の伝統産業技術の“今”を展示し、日本の未来を支える“地方”の知られざるポテンシャルをフランスの人にお伝えするというものです。

MCJPの地上階、約60㎡スペースの展示会場には、鶴岡市のきびそ、高岡市の銅器、福井県の打刃物、

岐阜県の陶磁器、和紙、木工製品、京都府の清水焼や西陣織、兵庫県のステッキ、高松市の漆器と庵治石オーディオ、高知県や佐賀市の和紙製品、熊本市の象がん



鶴岡市のきびそ

など、日本を代表する伝統技術が一堂に会しました。日本の金属加工シェアの90%以上を誇る新潟県燕市は、茶入れなどの伝統製品と、その研磨技術を生かした航空機の主翼を展示。また、群馬県は、日本の古典的な包装ツールである「風呂敷」にナノ加工を施して高度な撥水耐久性を実現した製品を紹介しました。

※展示品の詳細につきましてはこちらをご覧ください。:

<http://www.clairparis.org/ja/clair-paris-blog-jp/>

blog-2014-jp/917-2014-04-07-15-35-11

クレアパリのこだわり

実際の展示においては、クレアパリからの出展が自治体のみなさまにとって実り多いものとなるよう、以下の工夫を施しました。

・品物と情報の提供のみでOK

クレアパリから人員を配置し、フランス語の堪能なスタッフがお客様へのPRや展示品の説明などを代行するため、人員派遣は不要。自治体のみなさまの負担は輸送費および品物にかかる保険料のみ。

・展示機会の増大

メゾン・エ・オブジェ (世界最大級のBtoBのホームインテリア用品見本市。今年は1月24～28日に開催) とタイミングを合わせることで、見本市へ出展されている自治体そのまま品物を持ち込みやすい開催時期に設定し、品物の輸送料をかけずに展示の機会を増やす。

・仏語→日本語のフィードバック

展示品への問い合わせや感想について、フランス語対応に困らないよう、展示開始から2か月の間、クレアパリ事務所で展示会用の特設アドレスを設けて受付し、日本語でフィードバック。

・好条件な会場

会場となったパリ日本文化会館は、人が集まるエッフェル塔の最寄り駅、Bir-hakeimのすぐそばに建つモダンなガラス張りの現代建築。毎日たくさんの人が出入りする。

文化的差異の大きいフランスでは、いくら品物や技術がすばらしくても、単に置いておくだけでは品物の製作過程や使用されている高度な技術が伝わらず、品物の価値はわかってもらえません。例えば、さまざまな展示会への出展経験がある事業者の方から教えてもらったことなのですが、漆器などはヨーロッパの人々に馴染みが薄く、その完成度の高さゆえにプラスチック製の食器と見間違われてしまう、ということもあるそうです。一方で、歴史・文化にこだわりのあるフランス人には、品物の持つ背景にも関心を示し、価値を見出す傾向があります。先ほどの漆器についても、製造工程を詳しく説明し、芸術性や耐久性などを示し、日本人の食生活との間に長い歴史と深い関わりがあることを「物語性」を持って訴求したところ、大きな成果を得ることができたそうです。

今回の展示会ではこの点に着目し、品物の詳細な歴史的背景の解説に加えて、各自治体の展示には、伝統と先端の対比が一目でわかるよう、「伝統→モダン（デザイン性）」「伝統→ハイテク（ほかの産業分野での活用）」という方向性にそって、チャート仕様のレジユメをつけ、品物の「物語」が伝わりやすいように気をつけました。そして、質感なども存分に味わってもらえるよう、原則として手を触れられるようにしました。

また、日本を好意的に捉えてくれている人が多いフランスでも、やはり日本についての知識が少ない人が多いのが現状ですので、展示品と併せて、製品の詳細な生産地についても位置が一目でわかるように地図を配置し、また、地域の紹介も解説に多く盛り込みました。



高岡市の「曲がる食器」を実際に触って体感

多数の来場者が“地方の底力”を堪能

結果として、10日間で当初の予想をはるかに上回る7500人超の方々がお越しくださいました。たくさんの方からお褒めの言葉をいただき、ぜひ品物を買ってほしい、という声も多く、実際に購入を希望する来場者の方からの具体的なお問い合わせもいただきました。

また、西日本新聞や佐賀新聞には熊本や佐賀の展示品、四国新聞には高松の工芸品に関する記事を載せていただいたほか、朝日新聞や読売新聞でも展示会についての紹介記事を載せてくださいました。

継続開催し、より充実した展示会へ

そもそもこの展示会の発端は1年半前に遡ります。「日本の地方にはまだまだ世界で知られていない優れた伝統技術があるのに、世界にどう出て行っているのかわからない、あるいは世界に出る必要性すら認識していないケースが多い」「多大な出展料を求められる本格的な見本市への挑戦も必要だが、まずは世界への“気軽な露出”を」。こうした私たちの思いと、「パリ日本文化会館は美術館ではない。明日の地方経済の活性化につながるような企画を」という同館長の方向性が符合し、展示会の実現を目指し、ゼロから立ち上げ、すり合せを重ねて来たものです。今回が初めての開催でしたが、自治体のみならず、事業者のみならずのご協力のおかげで、成功を収めることができました。この場を借りて感謝を申し上げます。

この展示会はこれからも継続して開催していく予定であり、今回の経験を生かし、さらに充実した展示会となるよう努めてまいります。隠れた伝統技術をお持ちの地域、地域産品の海外での新たな展開を目指している地域の自治体のみならず、ご興味を持っていただければ幸いです。どうぞクレアパリ事務所をご活用くださいませ。



展示会場の様子